朝夷巡嶋記

第一編 巻之一

1278
7

村田

1278

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之二

東都　曲亭主人編輯

初輯第十三

過去来乃會話
巖堰水の煩襟

吉見冠者義邦ハ芹平が人となり。叔父ハ似けるなれども。こゝろ
ある壯佼なりと豫こゝ久ハその朝宿所ゑ倶しく還るに。他事もなく
勤王慰め式ハ物ゐ托弊を儲竊ゐ試るものゝ。よろづゐいと莫成おく。
奸佞ゝるゑ絶こゝなく。こゝを文武の才長こ。思慮ゐくゝて知れり。
かゝバ鬻ゑ義秀を射ゝるハ渠が僻事ゑゝど。主命黙止ゝゝ。當
坐の難義を罔人とゝく。罪ゑその勇ゑ負るなゝん彼時夏が殘ゐる家
僕を憐むゑゝ孤ども。そを苟ゐも幾るとゑ況てよゝく情義被こ。

と且は使ひ繁要のことなり。役めさうべきあり。と慥に認さるべきなり。
より捨てるべきなり。井平も又義邦の士を愛し賢を敬ふ誠心に感
佩しく。つくづくと思ふやう。あづの刀祢ハ蒲殿の。もん子なりとぞ人ハ云ふ。
現田舎に生育ち。恵蘭あのづから餘馨あり。加之才智学問もん又
君に遊ぶまゝ。後悪しき少年。りとの君に仕へるべ。附驥の功を
成べきか。と思ひ心を傾けく。挙動ぎといふうは。さるべき時夏ゆ。
疑まんるを知そまつく。心の底を人に知はらせぢ。さもるべと書載て。
人目だるまをちのびくに。あのがうにめぞ告ゆる。かくてそも。八九十日を歴る
程に。有一日義邦ハ朝夷が安否を問へとく。三二廣光に小厮を隷く。
ト猪庵へ遣せ。ゆ日ハ闌るまぐかり来ぢ。何とるく心ゆめ。芹平ゆ
由を告迎の人をや遣まべた。又うち捨くおくべた鉄と相彈まつく芹平ハ。

頭を低く沈吟し。朝夷ぬしハ世の豪傑。才智雋れく勇ゆまりあるかぶる
仇にあふとも。なでふるうひべた。然るべく。その道理にて欺くとなた。君子と
いふとも計まるべし。某ゆ仔細あるべ。三二が信を使ませるうち捨ゆるせ
るべ。此後悔ゆやゆん。と真成に答ゆるせば義邦ゆくうち点頭
如右ゆふ。熟に人しく問へ。そぐかくるまで不楽しうん。みづうの思ひてうち
べた。和殿も赴たゆハどや。うち籠をる対ゆ。あるとく八咎めと
あるべ。ゆるさゆハ日を暮る。夏の夜行ハるくに。ところよたゆめぞとよ。
続く。といそぐく。猛に割籠偏提るなど。物大くるゆ調させく。是を一回の扶
隷に擔せ。井平を招て出るとろハ未の刻たや過ぎて。主従宿呼[illegible]
直ちふたつとろ。一里あまりとて途にく。廣光が小厮を招くト猪庵
よりと還るまひり。義邦遊に呼びけく。廣光のごく遊ぶ。朝夷ぬしハ

差るゝ元や。你が今朝宿所を出しより。返命を俟ぞ在ハ。思ひかけ給くるれ由又。
彼庵へとく赴くんハいかにぞやと。問かけ給ひて。廣光ハ笑ながら。進を近つけて
小腰を折め。朝夷ぬしハ別條なし。疾退らんと思ひ給ふが。齋の偏提携して。
物くらすも長かるべき。是齋せ今かゝり酔てゆくと。おのが額に指して。呵ゝと
うち笑ひ側に立て井平に目礼をしてけれバ。井平ハ義邦の容を愛しく
打ともかくず。忙て宿所を出なひし。絆の趣を告る程に義邦とまうで見えくりて。
朝夷ぬしの安否を志りきども。さてまづまゐるがうたゞやハ巳ん廣光ハ罷りまく
留守せよといひしハ彼人に對面して。甲夜のほどに還らんぜよかうなるよと
のひあへど。頻に進む主の秩なく廣光急に捷とぞめ。彼処ハ山麓の孤館なり。
今より赴たまへる願しかぎりゆくども。止るて思召べし。この小厮をも倶させ給へ。
井平とのが副なるふまじくバ。何でふかろかゆべきさうまじ。他の重鐵よ名鐙き。

身にさへ征箭を御ぞ。只断離さすとも尚ぶ。身甲を重包によるとのあらじ。と
いふぞ義邦が東へぞあるに廣光が例の癖鉄塩子ハ人の家臣たるまじ。つらが
扶持きるゝ三四个月。譬バ魚と水の如し。あの人あらバ許多の従者ゆも
ゆくく事足るん。されバ如此さへども汝がこゝろを休るために。その男子をもねて
ゆくべし。女ゝさく損ぬ思んより宿所へ退まで休足せよ。大儀なりきといひ
けく。彼小厮をも労ひて進む主人をとぞ見まへぞ廣光ハ立かぶら井平に
主のうへを叮嚀に憑せえく。この所より只ひとり吉見を投てかへりけり。
さる程に義邦ハ日もはや没んとする比に卜居庵へ来くつきれバ庭門に物
あらまくいるべうともあらざれバ須臾て食立よりまで。つくとこまさりゐる木末へ
臼もも譬ふべき大蛇の蟠まるがれハこれハいかにと。驚きたりけるが。井平共倡声を
立朝夷ぬし。差るゝ元や吉見義邦。誼まゐり井平も来まゐれいかにやいかに。

とゆうくまでさてことよくてそ来のへり毒蛇へ既に死こと三ども。其処よりえへ入
こかうん背門よりてそと答る声ゆ義邦も井平も原来彼人恙ゐ[illegible]とゆ
ゆく退たらく選ゆ後方を見久まへ後僕ホハ戦慄き一及あまり迯退ゆ。
迯足死踏るぐら僵木さ為形勢ゆ井平へさもてそと志ぐく招たくかうやく
召よせみるゆろ共は背門より入まへ義秀へ伯若とうく。とと酒死喫てたり。
遠ーく刃を起しく。義邦井平を迎へ入まる曩ゆ江生を使ゆゆろ今又こぐうう
末ゆせーへ必定その故あるろの感じ。こるゆこよるゆ中へまん。とゆうざろゆへあう拡
どゆト絡毒蛇ゆ呑まーぐ使ゆ来ぐまべた人るろ死ゆ折よく来臨あと
ーへまろうざろ幸ひこの三且甘ぐく語ひる人と他支ゆるく数待せば義邦へその
大勇を只管感じく小腰死進め今朝ーを廣光をゆるうせーゆ返命の遅
くまへ必かとのろれよあくまよるくく蝠子ぐさゆゆ任せ。ろることくまる

途ゆくく廣光ぐかくるゆ逢ゆ既ゆ出ん刃ゆ差ゆ死。ろるとい人どもいこうゆ。
引くさんへさとぐゆくく歩いそじくまくく見まぐゆーゆへ仇ぎ毒蛇の変ゆるこ。
縛の疑ゆのまゆーゆ示ーゆと真成ゆ向ゆまく義秀ろうち微笑こ曩ゆ江生ぐ退る
ろ。さもちよく酔ーへゆるとゆ考ゆく假寝ゆーゆ折悪寒こもくく驚ゆ見ん
まぐこの巴蛇ぐ簷よゆこ中刃庭へ降こく頭へ折戸のゆとろゆゆあり放きべた
ゆのろゆ拡ぐ弓ゆ箭刻ひく縁頼よゆこその吭をぐさと射こよるこ為死
心下を刺徹ーく。十刀ゆまるゆ刺留さろ。企為ゆ菴主ト絡へいつの後ゆう毒
蛇ゆ呑ゆとく。中刃へそのロゆあり。衣裳の色ゆ彼法師と定ゆへ認されども。
某さへゆ蛇毒ゆ觸ゆく。疲労ゆ久れ賜ゆ偏提の残を迎須獨酌ーてゆ見
彼処へいゆくくゆ人と先ゆ出ゆ今庭ゆ出ゆへ義邦も井平も遠ーく後ゆ跟き
死せる毒蛇の頭ゆゆ尾のくるゆぐうち庭ゆ打めぐりゆへく驚嘆ーとへ未曾有

の大蛇に蟠りて尚かくの如し引伸さばいかならん朝夷ぬしハ天神欽鳥獲項羽ハ
いざしらず二人が所為として何人かよく之を刺ことあたはざるべし。と鋒齊一議
賛し撲门まで裡面に入まで点燭したるにつけ当下三人商量して是よりぞ
縛の勢を時夏に告んとて我邦へ状書写め一個の從僕を召のぼして云云と
さゝやきなる尤井平が亡ふせるを夕口またまるると教言て躬て刀野が宿所へ
遣し又一個の小厮よりハ消息を廣光に告よとて吉見へかへしつかくて又齊
ハ酒肉を井平にあたへて披せて義秀に祝の盃を勧めるに立ては義秀ふかく
欽びて冠者の恩義へ寔に高くきこゆる人詳に告ぎとの天相疑ふるの
絶てくれし加之嫗子生縁坂ふて一言の信にいかて大るる人とるるる察し
てまかくなば又何なる蔵さん是なるかなとひうけて時夏がト綰に贈し密書を
とり出せる両人齊しく見て更に驚くなるかん。そが中に井平ハ数回嘆息し。

恥しや朝夷ぬし。某ハ刀野が為に譜第恩顧の主ならねども。その家に仕へ奉る。
うへ練て容らまざれバとてその悪をあらはさんハ不義なんと思ひにたまへ
云云とけふまで冠者の君に尚後らしくも告ざりつ。縛被覚てかゝるくに
匿む甲斐もなし窓ぐるにト綰ハ朝夷ぬしの寝首を刎んと庭面より
潜びよる折もらりかく大蛇の為に命を隕せるあるなる是則天乃応報
善人を害ふ刃ハ竟にその身を劈くのかなしや。されバとてト綰が如る
毒蛇に向んや。あらずもゆるぞ。といへバ義秀うち点頭まさに右の
亡ト綰が調度を撈りて。この密書をバ獲つるに彼時夏が毒悪るる大
蛇にもまさりつ。いかにしてまさるを避ん。和殿ハ素より智計あり。熟考へと
猜窗ハ井平且く沈吟じ彼人郷士なりといへども北條主時政に所縁あり当
國の守足利殿義兼も等閑ならず款待さる。虎威を借て竊に謀られよ…や

冠者の君とのたまへるぞ。朝夷奴勇ましく
とも。あの地にあるべき危うき賢慮なり。密語は義秀ゆゆしく一筋に及
ばず。某白如右ゆゆしく恨みなく交を結ぶ由。恩を受けしまぎ
報せず中途にして別るゝ。とりわけ頻に嘆息を義邦も憐愍と共倍に
嘆息。今この三人志。なほざりなるべき列頭の夜埋を締めべき。朝夷奴を蔵
屋に留ると稱ずして。旅より旅に遣んと憐れみ給へ。幸ひに
乗らるべき。某紹介をば先方あり。加賀國石川郡小松の郷の荘官が
子に佐味笠内高利とのみ壯侠の筒長老に仕へしあるを。某も亦交篤し。
彼人頗学問あるこの性廉直にして賢を敬ひ長老に化せ。後に渠書を
ものとのべ。雁書手紙に往返して。某と疎うとき和君彼処へ赴く。欲て留
むべし。某が智音のうえ人知れず遠うべき。再會の時をいとどやかこの後よ

任せ給へ。とのたまへ懇切なるもてなされ。義秀ゆゆしく感佩し。某素より相識
なれば。今幸ひに死友を得たり。但外出を憚るべし。亡命の人を告げざるべ
き。決を分るべ行をなく死友といへんとの席に外人なり。あつらへ人と告
ぐべうさん。某が母なるものは木曾義仲の愛姫則中二權頭兼遠が女兒なり。
父は則鎌倉の功臣なり。延尉和田義盛なり。某質弱く病より。嬰褓にして
父は乗り遊び賜母を喪ひつ。かくて乳母が懐に抱きて安房の大磯に落ちぬ。
乳母夫婦は養ひて田畝の中に人となれども。満禄寺にて文を学び又上総
の廣常が舊臣なり。健田秀次郎は武を学ぶ。青雲の志なれども。
いふせん養父浅江の豊六は眼代。龍堀圖内が為に枉死し。養母葉は頭髪を
剪りて。巴の尼と稱して。廻國行脚の首途せり。某遺恨なるべく。その夜龍堀が
第へ潛び入り。圖内親子尼仲佛を殺して父の讐なるべ。六人を殺戮して。水行

朝夷義秀

俱利迦羅の大刀暗ま神龍ど憑ど
玄同
蝙蝠や
はだ色
乃
のこと
夕月
夜
冠者義邦
媛子井平

よりて武義を渡り下総より越えて圖らずも健田老人より環會彼孔をとる上僧を一年師ハ病著よりて果て藥餌も絶て功驗なく既にその終に臨て紹介の書を送り忽地に呼吸絶しハ某哀惜の至に堪ず真中の野寺に柩を送り送葬仕りてこの地に来り見るに父義盛ハ鎌倉殿よりの恩賜の一刀母の巴が像見え原ハ源家の先祖にて三田満中の遺物とぞ伝へる鑠々いと愛て不動三摩耶の形俱利迦羅龍を鐫るーさるハ俱利迦羅丸と名つけて養父ハ仇も件の大蛇もこの刀をもて殺殫せりこれ又とりひろげて刀を食て引拔ば夏月寒き蓮城の霜に照て月に銅花秋水光孤現ず隱て十く刀尖よりは白龍閃光升るが如し義邦も井平も音に伝へ俱利迦羅の大刀ハとは欲と燭を乗るに共に感嘆そこりける且くして義秀ハ刀を納めて傍に孔こが来歴ハ既に盡せり疑ふくハ吉見ぬ當國挟生の郷士にあり

へくそ。温子生も示ちゝ聰明怜悧下司に似ず願ハ弾よりも先考先妣ハいかにぞや。と問へば義邦貌を改め。とのるたゆく告べくもにに生僧に折紙をもて自の不肖を顧ずに語るも面なし所為なるべし。父ハ則幕府頼朝の連枝三河前司範頼ハ母ハ則安達氏盛長の女児ハ是が父絶者に弾まて彼を台寺に自殺の折濟の宿なる屋方へハ時夏が父刀野照時追捕の大將として馳向ひ恩免あるにこそ母を竊に害せり事發覺て照時ハ自殺しる時夏ハ執権時の提撕よりまく省らずこの下野へ流さるーと後よ定ゆ伝へさりこの時某僅に九歳廣光が兄江藏人廣通が智汁によりまく廣光夫婦吾俱に〻〻〻〻鎌倉に脱去て竹均長老ハこが外伯父なるに辛して當國に落ぬ。長老の愛顧を蒙り廣光夫婦が忠義によりまく人となりて父野心なるにと幕府ハ尋ひ某かて時自滅の後こが父野心なるにと賊時自滅の後

あることなどの追罰の沙汰あるべし。呂久さるべきもあらじ。と亦是後の祟をそうの幕府へ遊去やうくく左金吾頼家の代とるべしとぞ。帰系の路さえさりつれのハやうく朝夷ぬ。嚴父ハ則鎌倉殿創業の功臣さう。又母御前ハ旭将軍義仲朝臣の側室さる。古今獨歩の勇婦と世ハけハ今社あ是後とハ嚴父のあるを蒙まて鎌倉へ呂久さ是一国郡ハ領ーしるめ。ちで色くく面を對せ一日よりさ度人ぬるあべくまとと。そひーるハ違ひどぞふまをあると素性ハ後憑ーくゆと稱賛大さるるるざまハ義秀愧さ席を避某ハ和田ぐ三男。新将軍家頼と甚ハ延む。後父昆弟ハそうゆとと和君ハ等ーえめるうんや嵯山の先王ハ泥中ハ塗れてをその光ハ磯砂ハ異ん君ぐ性の温順るる类ハ公子の風あり。とるひゆ。うけく上坐ハ待まハハ義邦ハまる是式辞ひく。ある行るハいるくゆうえ某ハ浮浪のあるん維ぐ範頼の子とるべえ義ハ仕とえハ貴賤を問ぞその長少とてそ

るるるる和殿の青春幾許ぞや。と問きく義秀頭ハ拍十八歳よゆとのハる義邦うち微笑ハ色ハ殊ハ深見ハ某まハ一歳の兄ハ必る推辞あひそとひひつ舊の席ハ推居。温子ハいるふ。とえ久まるハ井平ハ小膳ハもるえ両君いづれも名家の嫡流。将帥の器ぞうまとるるハ以あるる数るるふ孫とも某ハ。木曽殿の郎内あく。殿拡腹心と呼まる。樋口次郎兼光ぐ子ハ乳名金刺とひひーあえ。元暦元年正月下旬。木曽殿対きるハ比親るくゆ兼光ハ將命ハ義さそうり。十郎蔵人行家ハ討んとく。五百餘騎を引率ー正月のそでめハ率洛をさく河内四ハ馳向ひ軍るハ勝まるとも帰洛の比ハ木曽殿の討死のよ世ハえハ軍兵ハみな落亡く残るハ僅ハ三十騎必死と思ひ決めつ。造道四塚より東寺のほとりハ歩せうり。時ハ源九郎判官義経の郎黨ぞ原十郎高綱と名告て。百餘騎まく蒐塞ぞ散ハ攻戦ハそのとえ兼光些も驍ぐど三十騎を魚鱗ハ

備。刀尖より火出るまぐ。縦横を身に砕立薙伏せ歇の大将原高綱を馬より
撞と砕く落し。頻に進んく戦に程なく兼光が由縁ある児玉党が和論ようち仕
しく洛に上り。摠大将判官殿の紀を一大刀怒こ者ようと計りとて我賞て忽
地に絶せ給ふ。そのとき兄某僧に四歳乳母が背に負まろ。近江のヨメ賀に落とぶろ。
稍六才にみつる秋の比乳母に持病の積聚重りく竟にむなしくなりぬ。そぞ老
母に養ひ十一とせの年の終りに。あるじの堀さえ対ありてよりの出斧もあ兄舟
の楫失へるまちしく。定に洛に上りて聊の所縁ある。何ぐ寺に奉公し。其処
ゆく読書に習ひ僧に学ぶ。吾倍素より孤にて。乳母が親の老
と居に養ひ。ことに人みるびく。堀子とて父が嚴期も木曾殿の討
死の為体を件の堀が告しうり。かくて年十四のころ。目を病ひて癒る
べきを。祈に清水寺なる観世音を祈りて毎日二百日普門品を読誦ま

三千度に及びしとき兄眼疾平愈ぬ。ことに兄井平と更に兄連菩薩
の利益ぬく。難病平愈の業を取まり。ちろに北條時政ぬ京都の守護に
ぬ。某を賞して住持に乞く。後鎌倉にかへりて。ほとり近く
使ひ彼ぬ。ひざる憑しくふどりひしく事に触れて仕を辞し。身退んと欲
ぬ。却に許さ。外様に遠ざけ。よろづに眼ある刃とりく文学
武芸その師に就く形のごく学ぶ。兄かりけ。ともあそびき執権父子時政時
いまぬ。使ぶ兄と憤激しく去る歳の春の比。ちぐく身の暇を乞ひ執権に
その願書を擲く大に怒り。井平が主にとて過りぬ兄時政に不足ある欲
奇怪に臭の眼にとまをべらず。又鎌倉に暦べ下野へ遣しく刀野太郎に
使せるに。途に逐電せば木を伐草を刈竭しても索出く頭を刎んとの旨
を存せよといとも厳く掟させく。人西三人添まてく刀野に預り邑より門客

なれども勢ひに當りかねていつとなく奴僕に等しく使はさり。時政はいさなりの人ども時夏の人となりに西君たちせるふがゆゑ。さるに某不忠死存せざる。あべ風速に加えて彼人の為のこころざしに三さび練めく聽はざへ身退くとの本文を守人とぞいべるかはるかはるに冠者に知れまり。假初なりの西三月其郷に住るのこころなくく朝夷ぬしに疑はるべ。今霄の團坐に為ること東帯なく朝に立とも面目とはいはまとめの望足なくいと繰精細に述べる義秀つくうち作のく。原来この壯佼ハこぶ実父の功臣なる兼光が子であるけるよ。

「義仲の遺腹子と告ぐやとぞひ久しく只管に唱歎なるのこと音を絶ぎ。義邦ハ殊更に勝の進む武器にて共倡に感嘆し。猛將に後臣とぞ忠義に仕く討たへその身死無を為ざるあるを後奥のことと。聲言ハ彼兼光ハ武畧勇悍に双の武士にその

計行はぎ遂に誅せられども。その子に又とこの奇才あり。後奥のこと疑ふべ。義邦孤獨の郷士ぬしく士を養ふに禄足ぎ賢者を扶持る德なくく。只管捨ることぞひあり。今よりは吾侍に仕へるべ。食ぬ〻ちて養べ。温子ぎなるのふぞや。と問はく并平頭をうち掉。この縁ハいまぐ成ぬ。時夏ハ能と唱ぎ已に搗るのの武偉む。某冠者に仕へるハ。彼人とは武歎んや執拗に告領主に祈ぬ武復さんと謀るべ。兄禍を招くに似るり。いま〻〻の人いることあり士ハ已を為るのの為に死ー女ハ已を飾ぶのの為に貌く。某只管崇さあるきく後ぶとはるをにあるぎ。君に禍あらせじと深く念じてまうきのく朝夷ぬ〻別を告ぐ。他郷へ勢ぬのひるべ。時夏躰く某を呂久さんと疑ひ。そのとぬ惜くく推辞るく。時夏必武結人只あるこより云と告く某を久しく人某彼処にかるとハ心ハ君ぶやとるにあるより。あん大事

あるんまへ死をのく恩義を報せんが何でふとろひでんいまご曉まるのふぞや時
夏ぶいさく怒るく某を遠離るが冠者は頼けき里へはさるるこのる死告させて。
渠をろさんゐえよりて某あん為のみるぷろうぬさぞ死のこ書つけくそのび
そのびが時夏は告さうる如此せざるを彼人が疑はんとおりべんとくが時死
やもちのへと真成が練ーる義邦頻が吾死掉く時夏何等の人うるかくもぞが
えち　　と　　
奸智が長る教らく縛の趣胃臆が羆めたる秘さべく。と諾ふる回答ふ義
秀ろさもとそと共侶ふうち点況冠者へ練死容るる江河の苡を容るぶ如ー。時
夏さふが来ることあくへ某假が井平が過失を勸解さかくーるん彼人このいぞ来ぬ
隙が紹介の書状さびてんや。とのそぶせる義邦へ硯筥を探るとる墨さう流と
さやくと支書さる行が江三ー廣光へ小厮二人が松とりさせく。背門口より進
入るへ井平へ出迎く。まづ彼毒蛇のる死告その他のる死密語ろ。そぶ祖が義

邦へ伴の書状を写ぞろうく義秀ふうち數ひ翌へ餞別ーく送るるふを
べるとども今よりるーくやうをへ北四ふ赴死ひく。なるくふ伯よくとも未春
雁の飯る比まへるぶ里ふ来ぶく遣びるへそるやぐゆへ幾遍も信を他のもの居。
佐味生ものと見るのよう死言伯るへと契るる。彼一通死遞与ふるへ義秀ふ
辱ーと右ふが受く燈燭ふ。さーよせる完名をるく。躰く懐ふ挾めーる義
邦へ廣光を召よせく對面を當下廣光へ義秀が武勇を稱誉てこの
義るる死敦びさて義邦ふ来ることやう刀野とのへ遣さるー。その使ものや
選りぬ彼人へ行もるく。さるる来会せんとん。このる死告ものるべく。又出安ふも
ちるもるーさふ使の男を休せく。別ふ二人の小厮をるく。某系るひとへぞ
義邦左右をるえるり。ちるふへ媼子へ廣光共侶へ吉見へかりるへ時夏が
指末るべ便なくるそとのそぶせへ井平やくをを出寔ふ宣ふとの如ー。

さろ是江生ハ今朝よりまたく往返ゐ疲労ゐひけゐ。今宵ハさつゐ浴り明して。朝夷ゐ送りゞてゐ翌ハ戴星く退出ゐ某ゐとゐ先退人といひ燒松とゐとおうゝたゐ出んとゝ[illegible]ゐ義邦急よ呼とゐ。かゐる折ゐ夜をこめて[illegible]遣ゐんハ公りと臣小厮ハまゐ明をゐ要ゐ。二人ゐゐるくゐ[illegible]ゐ御とゐく口のゐとゐゐ耳をさゝゐ朝夷ゐ人餓別又單衣夾衣とゐ[illegible]浅良井ゐさく浴さゝく絶胥准佑さゐ[illegible]と弊せゐしく示さゐて芋平頻ゐうち点灯小厮ゐ松明を把ゐせゐ。慌忙き出去ゐ。かくて義邦ハ又盃を更めく。廣光ゐ疲労を慰め義秀ゐ芋平ゐ来歴素性をかちゐく告ゐ。廣光只管感嘆。君たゐ[illegible]ゐ両雄の翼をゐるさせゐひゝゐ行ゐ[illegible]ゐ。ゐ[illegible]ゐ。ゐと歎ゝくゐと竊ゐこゐ祝ゝけり。この物語のほゞくゐ時夏ハ[illegible]ゐ来ゐうと待ゐゐゐその夜ハ音もせゐ天明く後ゐ時夏ハ八九人の後者をゐて。

領主足利義兼の目代八嶋室平師任ゐ相俱ゝく騎馬いゐゐく歩せゐ。柴門の内塞ゐく入ゐゐ。ゐ[illegible]ゐ。師任ゐ案内ゐく。真先ゐ[illegible]ゐ進ゐける義邦ハ庭門ゐ[illegible]廣光ゐ[illegible]出迎ハ師任ゐ対面ゐて義秀ゐ武勇の働き毒蛇退治の趣ゐ告ゐ[illegible]時夏ハ衝とゐく推隅件の大蛇を佶とゐく。ト浴ゐ横死を憐ミ嗚呼この八道微ゐせゐ。朝夷ゐ[illegible]毒蛇を刺留ゐ。ゐ思ゐ[illegible]ゐ。と師任ゐ決を引ゐ。ゐ[illegible]ゐ。寔ゐ和殿の宜ゐ如ゐ。察ゐ[illegible]ゐ刃を掉ゐく毒蛇ゐ刺ゐ心下を刺ゐ[illegible]ゐ。蛇毒ゐ觸ゐく業ゐ撓ゐ竟ゐその刃ゐ喪ゐ[illegible]ゐ。彼旅人ゐ射留ゐ[illegible]ゐ。この功菴主ゐ[illegible]ゐ。鄙語ゐ[illegible]ゐ。大骨折ゐく鷹ゐ捉ゐ。不便の宗[illegible]ゐ。ゐと合槌打ゐく[illegible]ゐ。ゐ[illegible]ゐ。ゐ[illegible]ゐ。ゐ[illegible]ゐ義秀ハ席を攘ゐく。時夏ゐうち對ゐ菴

主ト結横死ありしに某さくみを[illegible]陸奥ゆかりの紡ぶべく親戚あり。今
朝〜を直ゆ別ゑ告さく奥へ赴んとゆくん就さんは家臣堀子井平某ゆ
遠離らゆ。うぐく勘氣ゑ蒙くゆ後くまぐ公ろ〜うとうん某ゆ置土産ゆ
とのうゑ勸解ようと舊のごく召使ゑ。ありごと述〜ゑ時夏ハ苦笑〜く
いろ〜ゆ至極せり。幾足のうゑ留るゆよ〜ろ〜。和殿の意ゆ任せゆ井平ごとも
黙止ゑ已。呂久ゑべうゆくゆ。さろうるるゆけゆきそと初るゑ言変りて強面き
回答ゆ義邦主後憎〜とゆくど義秀ハ恨ろ氣色ろく。命ゑ長居ハ益益
ゑゆ退出んと両刀を跨へるゆゆう縁類ゆ。ありく撞下と尻をゆ。脚半の紐と
引結ゆく。笠ふく〜とうち被ゆ。悠然とうく出く去義邦も遽〜く別と告て
共侶ゆ出んとゆゑゑ時夏ハ扇をうく推禁め。吉見どの鹿忽ろうん菴主の
横死大蛇の好景實ゆ非常の支ゑゑゑ私ゆとりを置ゑゑど領主ゆ所なり。

おぐ出しつるとおぐさるるとと子舎人儲て湯をまゐらせ。あるじらのごとあろ共ふ異ろ
ゐんざまるんと所同まてく義秀ハト絡庵の縛の起。時夏師住がらひ住るろ。
もちまろく物ろまるハ井平ゆくく眉根をよせ。小ぶ対者ハ程あるまろんん雲時
ろろまとる井丸ゐんと真成ふ曾待く准備の酒肴を按排べ盃三順ゐ及ぶとる。
三二廣光が妻淺良井ハ衣裳ゑ更て義秀ゆ對面し。肴を添酌を執まく。鹿
嶋立を祝せしゑ義秀ハ疑待の淺ゐざる紙紛びゆのえて。盃をもくくゑハ淺
良井ハこまゑ受ぎ数ゆあふぬ婦女子がいろでる勇士のあん盃を織ぎ願ふ
ろぶ子ふゆるまてよ君が武勇ふ類ふせ主の為親の為ふ名をも揚家ゑを奥も
冥加あふせるひ孫とらひけく後方をれ久まるやよ小三二よとく系まてあん盃を
ゆるまとうと唯まとく阿唯と応ゆ廣光が一子小三二ハ憶しる氣色ゆく慶しく
麦まゆく母の側ふ侍ふるん淺良井ハこぶ子の項ふ掌ひけく額ゑ名せるる

朝ひる

浅良井井
平義秀ゐ
餞別す
井平
小三
あさら井

廣光が印ある子まく小三二と呼ぶ程なる。あん目をあらはしてよのとの義秀うち
ふく招ぎよせ現ゐ健ゑ生育あひぬ年八歳才ぞと問ふ。その横顔をこ
視げば小三八細小なる。右ゑの指を用ゐて示せば義秀うち点頭さそ五才ゐ
うまとゐよ年ゐ八倍く怜悧げ。あん身八君父ゐ不足ゐ義秀何等乃德
ありく類せんとく盃をゑ但この席ゐ列るまぐの織ゐとそと盃をさせば
母親さ一まのくゐ公金そそく戴せ銚子をとりて一酌落さぬ中ゐと飲
盡させ又義秀ゐ勧めけるまの叮嚀ゐゐ時移ゐ夏の
日の影衰へく端居涼しくゐゐ義邦主後ゐ立ちまを義秀ふく
呼ぶく今まであゑの飯を食ゐ彼師任ゐ引とゐくまく脱る路のなゐ
べ一斯と思ゑ彼ゐまく辞別をゑゐ(ゐ)ゐ今一トとび對面せで遺憾限ゐゐ
ちく及ぶ所ん。かゐまのよゐ外面をうち仰ぎ

井平も又呼ぶく。こゐ全く時夏が呼ゐゐ。と思へども淺良井共倡鮮を竭
く且くゐと見一ゐ義秀竟ゐ住まぎ昼夜と彼ゐ間近くもあくまぎゐ
帰宅を俟んとく一止宿ゐる程ゐもゐぶ投くゐくゐゐ友ゐ吉見ゐ隠
まくをゐるゐど好侍人ゐ笑るべ一昨通宵酒ゐ明一くゐべゐとゐ
果つ女ゐく名残を惜んや一十里ゐ三里ゐ(ゐ)ゐく宿を投めゐん。
かくもくゐよゐ饗応歓びゐ述竭一ゐ(ゐ)来春ゐ又遊歴一て必安否ゐ知
まうさんをゐく自愛ゐ人といひけく立んとゐ理ゐゐゐゐ淺良井ゐ昨夕
猛ゐ刺立ゐ行衣裳ゐ一包の路費をとりそそく茶一く義秀うちとりゐ
さ一よせとゐ進せよと豫くゐゐ義邦ゐ驢ゐゐゐ。せめくゐゐゐゐ八辞ひ
ゐゐど。ちん身ゐ著させ人ゐ。といひゐ義秀ゐ久一く送ゐくゐゐ冠者の賜
ゐゐ。ぞう推辞ひゐゐ。さゐゐ衣裳八外物ゐ某衣の蔽ゐゐ恥とせぞ。義ゐ

背ざればよろの恥の路費は故郷に出るとて母のおくりしかる所餘りあれこれは
これ又おん日まで預りおきるといひあへど再び立んとせる徳よ淺良井
賸さ引とも是を受させあるで家留守せる甲斐も侍らぬにあらずとて
さるうへは是の上に侍らんや切くと是を納めおくと若ににぎりしかば義秀遂に
意を枉て新たな衣を脱かえ舊なる衣は殊さらにいと惜しげに畳みけるに
扇を開えて是に載せ江の内室に憑むとおもへこは舊里にありし時母がてづから織
の夏衣の肩膝は蔽ふとてもつぶるまで綾に推にまさりてよるものあるかりしあれば
乃ちかよ物ありとて且く是を質として留おかんといふに葛籠塞なりえつらに。
且く領ましますとてふ淺良井はその孝心と廉直なるに感佩して聊も亦
とまる推辞ず宮に気あるらむ得てしまふ垢つたる汚ましく代るにかけて
洗濯くぶらく秘れ侍らまし。といふよ義秀大きに歓び嚢の銀懐ふしく。

淺良井ふに別を告たり。外面に出しかば井平はあらずに代て里盡処まで送りに
きん義秀さらく辞とましども。なほ別がたに泣忍ず。二三十町来ふ名れば義秀
とまる又ひく並木の松よ尻をかけ媼子久しき日の暮ざるよこの処より還り
ませ時夏に来つましまるべ和殿の為よよきとおもじ。とらくといそがせども井平は
立もさらずて其とて身のうへに彼人をおそるべき咎めが歎へは両君乃
ためなるをおんべら今豪傑に邂逅して教を稟る日久しからずを憾む所なり今
又公の疑惑あり。願くは君の明断よよくらん爾よ告まうせしぞく。某が父兼光は
木曽殿の勇臣なり。義高（木曽義仲の子頼朝の女聟え）今なほ在まし給ひば某とまつに仕えに木
曽殿聲まし給ひし此件の君は武蔵なる入間の川の畔にて命を隕させ給ひぬ。
と後に仕へくの惜そても詮なきは只主家の滅亡数に時政ぬしに仕しからふ
との恥あるし刀野を去て義邦ぬしに仕んとせしども如何かれは又和君にも随ひ

かくてさるべきく刀野が家のあるじ吉見とのくるゐ謀ぶ福氏窮こ主と
賣るゑ又時夏が為ゐ謀く義邦を陷まるべ策と佐く竟を討んまるべ氏
べ一十日も。とかくこの地を脱去く。天運ゐ仕せん欲許しまるべ和君ゐ後ひ走
らんとぞゐのこといく義秀既氏うち掠とのゐ甚まるべうとぞ義邦ハ和殿まるべ
既ゐ佐を為うとまるべ。さる氏今辞せざるべ。とる氏捨るゑ不義るのるどやカ
之和殿も主ゑゑ時夏怒ゑ主ゑを逐ひ義邦を陷めるん是氏ゐひ彼を思ハ
さゐ住るゐまるとのゐ。ゐ愚意氏ゐく推とゑハ刀野ハ和殿が主君るのるど
吉見も和殿が主君ゐあるど主るべ後人めハ勢ひ敵しかゑ氏有ん主
るゐどゑく捨ゑゑハその志同じ氏有ん渠氏まんとまるども為るどとまるを
佐んとまるども為るどハ黙ゑく志づゐ時を俟べ白龍も時を得ずて蚯蚓と
穴を共ゐまれハ蜣蜣の為ゐ苦めん陸。とるも亦天るり命ん和殿逐電まるゐ

及びく義邦の為ゐるゐ脱去るを猶可ん去く禍を逃さんるゐ謀のよろしゑゐ
あるど義秀ハ和殿と舊縁あり然とく今ハ告ゑひとまるも亦時を俟べ。よやそ
耶も蔽をとるく愚意の判断かくの如し。鄙諺ゐいゐ釋迦のれまんゐ経を誦む
類るゐんとくかへまるべとのゐ井平ゐく感伏しく更ゐ又一幾よるゐど言うけ
るゐるまゐゐゐ某不肖ん之ども猶く教を守ゐんくまるくも再会の時を俟
なるとゐゐゐく嗟嘆まる招ゐ義秀ハ獨と身を起。さゐべまるゐく決を分ん冠
や者ゐ言偽ゐゐ祝とゐゐあへど踵を旋し北四氏投く去ゐゑ氏井平ゐ遠く
るるまゐく後影を目送るゐ遂ゑ吉見へ還まるゐ。さゐ祝ゐ義秀ハその日ハ僅ゐ
三里ゐく里の白屋ゑ宿を投め次の日夙ゑ出ゑまるど路費とく与しくを
あゐど素より意ゐね張るゐゐ越路ハ殊さゐゐ名所多ゐ途のゐくてゐ名山
霊地を拜まるどゐゐ山ゐあへべゐゐ遊び水ゐあへべ水ゐ乱び張ゐゐ

旅の日を弥生の越の州へ。くさ〳〵ある。秋の初風をむかへつゝ。名ひの外の日ろ経へく。七月の廿日あまりまゐ信濃越後の界の跨る越中四新川郡佛岳の麓と遠きまで。婦負郡岩神といふ里を過るゆ。黄昏ゆるゆるとこの日ハ九四日ゐまでハ地蔵あつまつと思ふく。家毎まで〳〵げる燈籠を生〳〵鉦を鳴〳〵。鼓を鳴〳〵。童男童女うち雑てさまく〳〵る燈籠を頭に載き茜染の浴衣のちぶ〳〵ゐるを被くるとあるゑ。或ハ縹縅に褐木戸今宵を晴と打扮ゑ。長首の一隊。彼首の一隊あるゞ。態の躍るゆり。鄙ゐあまどめぐらゐる。ゑ。めまく〳〵と立ゆるく〳〵ゐるとハなく〳〵日ハ暮つ。かく〳〵宿ゐる所投ゐ今宵ハ拵ぶ日ゐまでとて。いづこの家も宿と貸さゞ。せんとゐるくゆゐく里書ゐまで来ゐれば人食猛に走りちゞ〳〵。後ゐる町ゆ役猾あるとゑ山の主ゆやあゞ。側杖ゆ打ゐるゝと禁るゆあるゑ。ゆくゑあるく。門ハ戸を鎖灯所うち滅く。

寂莫とゆさみ〳〵く如法暗夜ゆゐ〳〵ゐ義秀旅宿の便所失ひゐ。前面ゆハ人家ゆやあゐとゆけどゆく青田のゑゐく。蜘ゐゆ仰ゐる田の畔の前後定ゐゐふぶゑとハいつの程ゆゐ途惑さゑてく。その夜初更の比及ゆ郷ゆ過ゐ〳〵岩神の里書処ゆ遠ゑ来ゆゐり。ゐハいふゆと呆ゑ果ゐ。ゑゑゑゑゑゑ右ゆゐる樹立の間ゆ引入ゑてゐる家あゐとあゞく。火の光隠ゑとゐてゐれゞよゆ憑〳〵ゑ。さゐ〳〵ちゐつこの横巷路ゑ進ゑ入るゑ二町ばゐゑ親ゑゞ果〳〵ゐるゑくなゐぬ。いと大ゑゐる家あゐゑけり。夜目ゐゐゑどこの里ゆく富るゆゆやあゐんどゐん。南面ゆ衡門あゐゑ裡面ゐゆゐゆゐりゐる冬木ゐゐゐゑ角門ゐる扇を推ゑゆ。ゐゐ周ゑ〳〵ゐ衝と入ゐく又ゐゐゐゆ左ゆの方ゆゆ牛小屋あゐゑ農家三ツゆ四ゐゐあゐて前面ハ則母屋ゐり。樓ゑ簾ゐけゐゑゑく燈火の光鮮明ゑ遥ゆゑえゑハとの燭ゐゐゑ。庖湯のゐゐゆ人数畳こと声ゑゑハ立ゆゐく。門ゆ小厠とゆゞき

あ出て細目に戸を引開つくと透し見て何人ぞと問へば義秀は慇懃に申さるよう我告ぐるに宿を投ずる件の男はよくこれ作りたるあるところの人なり今宵さてゆうべ三つ時いと難義なるとぞ主も家隷も胸淺ましくまだ夜食もせぬうちなど泣き口説く商賣の最中なるに孤なんぢ人を留むべしあるべきやうなれども退出とのたまへど開けさせ戸孤さてんとする程義秀息を吹とめ。さらば三つ時折とゆめつ。乞求むむ。

仍て主ど鄙語めいし膝とも高量数るべき孤ども某は両刀を腰に帯さり。偽

ま敢くあるまじ。縁故を知らぬ憂孤屑なるよすがもあらん欲しいなる

るぞゆめゆめ他言は終くまさるとなる。大なるを現示し人とならるくいなるく

舌打鳴らしいふとも益なるぞ。さぶもん身が出るそのあはれを告

おうさん今宵あるべの愛女が燈籠舞踏をこれに出く悪棍に奪れなり孤

救ふべし彼らはあるべ。あるべ夫婦が憂苦悲歎さてそと思ひ出る人宿貸ぐるは

この故なり。と出る人と遠しく。又戸を閉んとする孤掛ぬ義秀を戸にゆを掛く。

露だるまを動せぬ。その後るに究く易る某既に今愛孤救ひとりて出る。

あるべ出る毒告ぐるべしといるまく走るへらんとせぬ。ばつるるげにうるて。

いるくそまに偽るうん人のちくで救るるるるぶるでふ歎んとの里に人橋渡

ても。あるべが財を盡して。かるべうをあるざるに両刀は誰も佩独り宿りとる。

投る孤る他郷の人が孤るとも。その令弱は何処にとるる来

るべ遠与るべといるせを果ぞ義秀は呵くと冷笑ひ原来吾件を疑ひるるる。

現両刀は誰も佩世最過半は武士るるども賢不肖あるべ剛億あるべ一撃はく

論ぜんや幾女子をるくあるとも。その親るべで誰るべ遠与人暇いるとどいとけて

世るべは外面よるべ戸を引さてんとするべ小厨は睨く敷居るうち乗るべ北月孤

拄杖を突き足を張く周さまで。嗚呼堪くも。脆が折まる。雖も其よ彼を
き。
あくことを教へと叫びーゑとの向荅を仕つる。両三人ゑを生く戸を扶ま
ま一件の男をいく叱りく退せ客人且くおくせの人宮ふよ所あくふ告く。
回荅おうさんと他夏ゑく勸解く。そぐ奥ふ走り入まえ。こぐゑ(て)音も
せど猶あくく老僕と称ぶき四十あまりのをとを生く。武秀が名字を問あくが
見えなおんとおうをゑる且さゑゑとのひうけく今いふ玄関の式堂ふ誘引はく。
菅延うち布く武秀ふ尻を撫させ小厠を召く大たゑる。盥ふ湯を汲入を
させく足ゑ濯せゑるーさ。初ゑふ似ぐ叮嚀ゑかくて客房ふ案内ん。燭臺
二臺並建さゑゑ昏のごくゑと明ゑ武秀ハ坐ふ居く。あくの生ゑ俟わどふ。
男の童湯ゑさもそ。その磁器さゑふ鄙ふ似げゑくいと浄ゑ。床の間ふ脚高き。
堆朱の臺ふ紺青石の置物ーく。佛繪師良秀が不動の懸幅を掲さを活花

あを香の煙細ゑゆぐ立沖る地蔵ハ不動の本地ゑ是ハけふのふ知ゑを
ゑふ且くーくあくの翁對面さを年齢ハ五十あまりゑ(ゑ)越の麻衣ふ青葉
紗の袴を穿さゑ。賓主の坐定ゑく。あくがらふゆう不意ゆ客人いぐ文見を
救ひとぐせゑゑーとうけゑる。ゑ実ゑゑくんふハ是再生の高恩なり。何処
ゆぐゑ使ひゑ(ゑ)巨細ゑ知ゑ(ゑ)ゑとのふ。武秀ハ仕ゑくうち点改現ふさゑゑのゆう。
ゑゑをとゑ名の同じ元めあを面の似くゑるあり。世間ふ女児を畧ら是の
翁のくふ限ゑべゑぐ翁の産業令愛の年紀骨相奏畧ゑゑ悪掘の姓名住
ようゑゑ祥ゑ説示ーゑ言符合さゑゑハ令愛を遠与ゑーこのゑ人言ふ告ふ推て
呼武投ーといふをくあくふ小塵武進ふ宮ふ所その理あを某ハ稲尚武名ゑ
宿ゑ武投ーといふをくあくふ小塵武進ふ宮ふ所その理あを某ハ稲尚武名ゑ
判五と呼くめのゑ先祖相美の田園百町ゑある紙ゆく里入綽號ーく百姓の
阿爺とゑ人ゑ一女あり男児ゑ(ゑ)女児ハ友鶴と名けゑ。今茲十八歳ゑぐゑゑぬ顔

地蔵大菩薩
友鶴
暮燈籠
舞踊を観る
友鶴

色も醜くて心ざまも親に孝え嘗て佳婿を擇むにいまだ定まる壻ぶ孫なる。深
窓に養ふ月く。外をば絶て人世ざまとどもとの郷に宝珠山地蔵尊寺といふ蘭
若あり。年の文月廿四日に本尊の齊會あれば寺にさらるる里さまに燈籠を
掲出し。或へ舞蹈を奥行し良賤慶賀。遊ぶの日とて愚老に則件の寺の禮越に
ぬる友鶴に幼少より。始く地蔵菩薩を信じ奉り。年十三といふ秋の比より。
日毎に地蔵経を讀誦さるる。今にあるぬく間断なる。かくまぐ信ぎる仏まて
ゆ。まもに則女兒ぶ情原に任せ納涼ぐるに曛昏より。奴婢三四人冊けく。
地蔵尊寺へ参らせしに不慮に悪棍に奪ぎさり。その悪棍に豪首あり。
氏に日理名に魔平太潛稱ぎく山の主とのり。原に奥の泰衡ぶ残黨とぞ
伝へる。今見に劔岳のとろくさに近き山麓にをり。くだんの魔平太陸奥
より。當國に落ぎまり。遂に黠の支黨を聚合く。彼此に横行さ動きれば。

里人を打擲く殘を生ぎまに殺さぎ。或に恐に生変晩稲を刈ぎ。
おのぶ腹に肥し。或に里の女の子を捉く。白昼に輪姦し。殊に美目より婦女子
に魔平太ぎり嘗試く。年に歴れども逃さるる。悪幻弊に竭しかく。
寔に鳴乎の癖者なり。山里の甲兵なるに官遠く愁訴に由ぶ加旃。
いぬる正治元年の正月十三日。鎌倉の幕府将軍頼朝卿逝去ぎ。以来新将軍家
頼朝の臣のぶ政正しうぎさまぶに奥のくるに泰衡ぶ残黨蜂起し。又近に比越
後に城小太郎資盛ぬ。謀叛ぎく。東軍と合戦し。遂に落城に及ぶ。
越路に入るに静ぎにより。郡司縣様荘の別當ぶ。仲のえさに人くに土
賊を捕るに皇ぎず。國のぶに好に鋤民の愁を除んとぎに稀えて死ぬ。
魔平太に時に泣くと横行く。王法ぬ。武威を肩とぜるぶ隨
に倍驕奢を極めく。ぶに飽に死ぎぬるに某に里の長まて家属に日に

かゝる折ハ幸ひ今ことの年末彼ホガ乱妨ホあハざるホ悔ーくと地獄おろうホ最愛の女児を奪ヨ慚愧周章今さらホ決定る主意ヨ告る所待合せが如ホ児を返ーヨうと落涙ろくぞ口説ける義秀ハつくと俯つく握る拳ハ捺ヲ。原来その魔平太奴ハ兎ーかゝる癖者ん某いまゞ今急ハ救ひとりとろホ。然とて宿ろハ投ん為ホ欺ろくろいろホ善ホハ與ー悪ハ多ぞ四訓ー。弱ハハ扶ろく。強ハを折く。見某ガ一癖ん嚮ヨ街衢の騒動風声今又ろホ立ホろくその厄難を伝ーろべん過ヨホ忍びぐく。いろぐホ対面ーく。一臂の労を扶んとらひホろヨび如此くと辞を設ヨびけそ。豪家の主人と撓衡ホせく。精細ホ伝ーくとハ多ろヨ小厮一人貸ヨ今ホヨ劔岳と共ん彼悪棍ガ宿呼ホ赴き魔平太ホを撲殺ーく今愛を奪く来ろん躊躇ホろとろホ。判五ハ呆ヨ果く瞬もせどうち熟視ヨ。ホ能ホ多ハ客人ろ早ホを敵ヨ

よろのぞホん刃身長六尺有高肥膏つハ力ホとヨ彼魔平太ハ梟雄膂力ホ人ろくのホホホぞ加以その伊ホ属ヨ悪棍ヨ虐九餘人越ホ赤熊太三九二中太夷守水六臭水の沼太郎ろど呼ろホハ万夫無當の力士ろり。撃剣巻ヒ法相撲の伝ーヨ也ろ呼ハ三面六臂月ホヨびとく。いろホく彼ホヨ敵せん毛を吹く舞を求ろび後悔其外ホとろヨ。ヨ用こと能抗て。頭を掉ヨハ武秀ハ呵くとうち笑ハ勝負ハ人の気少ホよろヨ翁ハ仇の勇と知ヨども。いまゞ某ガ勇を知ろヨ。嘗舊里を出ヨハ親の讐敵六人を殺ヨ弾せーヨ。この大力ん敵ホ百人のろいろホ。何のホとれろひべハ聊本変ハ試ヨ見ん。とらひく左右を見ん。床柱の孔とりろ碁盤を引よ寄く。僅ホ右の指をろけく且く撃く燭臺ろ。蠟燭の灯を扇ーん。只一ホ打滅ーく。碁盤ヨ臂をろけて推ーとハ人忽地ホ四の脚折摧て

貧子の下おぐく減じぐ。かる力士も世ぬ亦あるべあると舌を巻くおぐの翁ハスさぐぐ呆るるの半晌だるに義秀碁盤を掻遣りくこまてくハ勇とさるの足くぐ刃の截味ぬ見へといひあへぐ倶利迦羅の刀を抜て青銅の燭臺と覈き砕るの草を刈ぬとい易く燈ハ真直ぬ蔕くその燭ハ更の滅ぐぬとり。判五ハ縛の形勢の驚死あそまてく額を著き君ハ正く天神ぬ捷利疑ひいぐ圖らぐくあんくぬ義借くるぐ女児ハいのもさぐんとの一郷の毒を除ぬ花星ぬ人の欲びん併友鶴が手来信に成る地蔵菩薩の引接利益欲俟ともるぐぬ客人の夜飯を進ぐせん浴湯の加減もよぬ比るり途の疲労を休へくこぐ任せる赴死ぬへとの義義秀使あへぐ。遅くさるときハ今愛と織さくとのやあぐん夜食もいまぐ欲くぐ酒あぐぶ出一盃一碗を傾きハぐぬ一斗を竭せば一斗の勇あり。かる時ハ大盞けそよぐれとく。といそぐぬ。あぐぐ判五ハ

あるもく熟び。と答へ慮くく賞るくく老僕義召くぬと分付るの老僕ハさくん小厨ぬハ次の房の竊使して義秀が勇力武藝を憑くぐ見熟びて瞬間ぬ酒義温め肴を按排へ。あへぐと共の管待ぬぞ義秀ハ些も辞ぐ大盃と引受へ三度喫て舌らち鳴ぐし兵粮ハえや縛足まり。あへぐの翁ぬいへべるは小厨二人の竹輿を早くく郷導をさせ竹輿ハ今愛を乗せん為ぬ。その他のあへるくも要ぬ。さるぬ件の二人とのあへ魔平太が宿所ぬ五十町あるさるぐぐ某既ぬ今愛を救ひとぶ暗号をせん猛火俄頃の間ぬ人ぐ彼処の走人集るべ。かるハさるぬ利とるの義擇くぬ人と規示せば判五ハ老僕と二人量根ぬ平ぬくんとく。そのあへるを召せば義秀ぬ使ちく招さくく盃とせん規示をと初のぐ件の二人の郷導させて劍の山麓へ赴く猛の夜ハえや文中のあるぬ

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之二終